第十巻の発刊にあたって

このたび『寝屋川市史』第十巻本文編を発刊させていただくことになりました。これをもちまして総ページ数が八千を超える『寝屋川市史』全十巻が揃うことになります。この編纂でご協力を賜りました寝屋川市内外の多くの皆様方に対しまして、厚くお礼申し上げるしだいでございます。

現代社会においては、前例踏襲にとらわれない変革が求められております。しかし、これは、過去を忘れ去ったり、否定したりするものではありません。いつの時代でも人間は、その時その時を一所懸命に生きてきたからです。むしろこのような変化の激しい時代だからこそ、先人たちが築いてきた歴史を記録し、子や孫の世代に伝えていくべきだと考えております。そして、この『寝屋川市史』が、その礎となることを祈念いたします。

結びになりましたが、昭和六十三年一月に市史編纂委員会が発足して以来、二十年の長きにわたって史料の調査・収集、執筆にご尽力いただいた編纂委員・専門委員の先生方に衷心より感謝の意を表します。

平成二十年三月

寝屋川市長　馬場好弘

第十巻の発刊にあたって

昭和六十二年度から開始した市史編纂事業も、この第十巻本文編をもって終了することとなる。あしかけ二十年にわたる大事業であった。この息の長い事業を終始理解していただき、あたたかく見守っていただいた歴代市長、市会議員の方々、そして市民の皆様に感謝の意を表したい。また、編纂のために快く史料を提供していただいた方々、調査に協力していただいた方々に心より謝意を表する次第である。

この事業では、考古・自然地理・古代・中世・近世・近現代・美術・建築・民俗・鉢かづきの各分野において市域内外にわたって広く関連史料を調査・収集し、それらの成果を第一巻から第九巻までの史料・資料編に収めた。そして第十巻は、これらに掲載されている史料・資料をもとに新たな資料や研究の成果を加味して寝屋川市の歴史を叙述したものである。執筆の基本方針としてわかりやすい記述に努めたが、少し難しい箇所もあるかもしれない。しかし、本書を通読していただけば先人たちがこの寝屋川市域でいかに苦労し、工夫し、たくましく生活してきたかをわかっていただけると思う。そして『寝屋川市史』が、皆様方にとって将来、寝屋川市が歩んでいくべき道の羅針盤として活用されることを願っている。

平成二十年三月

市史編纂委員長　瀬川芳則

凡　例

一、本書は、『寝屋川市史』第十巻本文編で、市域及び周辺地域の歴史を叙述した。

一、本書は、いわゆる「通史」ではない。原則として時代ごとの内容を編年的に配置しているが、市域に関する史料の存在にそれぞれ偏りがあり、どの時代も同じ事柄の章立て（テーマ設定）では叙述し得なかった。そのため、各時代の史料から導き出し得る事柄をテーマとして叙述している。よって、これを通史編とはせず、史料・資料編に対して本文編と称している。

一、本書の構成は、自然地理・考古、古代、中世、近世、近現代からなるが、自然地理や考古というのは時代区分ではない。本来、考古学的手法を用いた古代や中世の事柄も考古の中で叙述すべきであるが、同じ時代の事柄が多岐にわたって叙述される煩を避けるため、本書における考古では便宜的に古墳時代までを扱い、古代以降の考古学的内容に関しては、各時代において叙述している。

一、本文の叙述は、原則として常用漢字、現代かなづかいを使用した。ただし、固有名詞や歴史用語等はこの限りではない。

一、本文中の人名等の敬称は省略した。

一、本文中の図・表・写真には、編ごとにそれぞれ一連の番号を付し、その一覧を巻末に掲げた。

一、本文中で頻出する『寝屋川市誌』及び『寝屋川市史』の参照・引用箇所については次のように略記した。

『寝屋川市誌』一九五六年発刊　→　（『市誌』一九五六年）

凡　例

『寝屋川市誌』一九六六年発刊　→　（『市誌』一九六六年）
『寝屋川市史』第一巻考古資料編Ⅰ　三六頁　→　（一巻三六頁）

一、巻末に市域に関連する事柄の年表及び参考文献の一覧を付した。本書と合わせて参照していただきたい。

一、執筆の分担については巻末に一括して明記した。

一、本書を成すにあたり、ご協力いただいた方々や機関は巻末に掲載させていただいた。謝意を表するしだいである。

寝屋川市史　第十巻　本文編　目次

第十巻の発刊にあたって
凡例
目次

自然地理・考古

第一章　大地のおいたち　……2

第一節　市域の自然史　……2

一　山地の岩石と平野部地下の基盤岩　……2
生駒山地北端の花崗岩／2　領家帯（島弧に平行な地体構造）／3

二　大規模な地盤の変動　……6
近畿三角帯の山地と平野（盆地）の分化／6　枚方撓曲の地下は断層／7

三　丘陵をつくる大阪層群の堆積　……8

瀬戸内地帯の沈降／8　成田台地をつくる大阪層群／8
四　台地（段丘）の形成……9
第四紀後半の地形形成環境／9　高位段丘／11
第二節　第四紀の気候変動と自然の変化……14
一　平野の形成……14
最終間氷期の海進と寝屋川地方（上町海の時代）／14
最終氷期最寒冷期の海退と寝屋川地方（古大阪平野の時代）／16
縄文海進と寝屋川地方／17　河内湾の時代／17　河内潟の時代／17
河内湖の時代／18　低地の沖積層／18
第二章　黎明期の寝屋川市域……20
第一節　旧石器時代のひとびと……20
一　大阪の旧石器文化……20
岩宿遺跡と旧石器文化／20　捏造事件／20　旧石器時代の自然／21

大阪の旧石器遺跡／21　火山灰／23　市域の旧石器遺跡／23
二　石器の製作技法とナイフ形石器……24
瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器／24
第二節　縄文時代の讃良川遺跡……26
一　土器を持つくらし……26
土器の出現／26
二　縄文時代の時代区分……27
時代区分／27　市域の縄文時代遺跡／28
三　縄文の交易センター……31
讃良川遺跡／31　各地の土器／32　多彩な出土遺物／32
四　クリの貯蔵穴……36
めずらしい貯蔵穴／36
五　縄文文化の終焉……37
縄文文化の終わり／37　稲作と縄文人／38

第三章　稲作のはじまり……40

第一節　湖畔の高宮八丁遺跡……40

一　稲作のルーツ……40

注目あびる長江中・下流域／40　水とのたたかい／41

二　縄文と弥生の接点……43

環濠集落／43　本州北端まで広がったコメ作り／43

稲作開始の暦年代／45　長保寺の縄文土器に籾痕／46

三　米とドングリと……47

見つかった稲のプラントオパール／47　ドングリピット／49　遺跡出土の食資源／51

四　北陸産のヒスイの勾玉……52

特色ある物流／52　ヒスイの産地／53　縄文系勾玉や玉斧／53

第二節　丘の上の太秦遺跡……55

一　高地性集落と倭の動乱……55

武装したムラ／55　低地から高地への移住／57　戦士たちの墓／58

第三節　河畔の楠遺跡……60
一　弥生の青銅器……60
銅鐸／60
二　青銅器工房をもつ楠遺跡……61
銅鏃の鋳型／61　湖畔の工房／63
第四章　古代国家の形成……66
第一節　五世紀の港湾　長保寺遺跡……66
一　外洋航海できる準構造船……66
巨大な古墳／66　井筒に転用された古代船／67　新しい祭祀／68
第二節　古墳時代中期の太秦高塚古墳……70
一　各種の埴輪と副葬品……70
初期群集墳／70　太秦高塚古墳／71

第三節　古墳時代の渡来文化……75
一　韓式系土器を持つ文化……75
移動式のカマド／75　造り付け式のカマド／76
二　乗馬風習と治水の土木……77
馬の登場／77　河内湖畔の製塩と馬飼育／79
第四節　古墳の終わり……82
一　群集墳の出現……82
横穴式石室の採用／82　市内の群集墳／83　寝屋古墳／83　奥山一号墳／85
二　終末期の石宝殿古墳……86
終末期古墳／86　石宝殿古墳／87
古代
第一章　律令制以前の北河内地域……90

第一節　ヤマト政権と河内地域……90
一　ヤマト政権と北河内の開発……90
ヤマト政権と古墳群の移動／90　河内政権の成立根拠／90
河内政権の成立基盤と北河内の開発／91
二　茨田堤の築造……92
茨田堤の築造伝承／92　茨田堤築造の労働力／93　茨田衫子と武蔵強頸／93
茨田堤築造の時期／94　堀江の開削と茨田堤／95　想定茨田堤の概略図／95
三　茨田屯倉の設置……98
屯倉は多様な用益地／98　茨田屯倉／98　御厨／99　葦原／99
馬飼／99　氷室／99　水田／100　田部と鑊丁／100　屯倉の管理／101
河内・難波地域の開発と茨田屯倉の機能／102
四　河内の馬飼……103
馬、絵馬の出土／103　関連記事と馬飼の本拠地／104　馬飼は渡来文化／105
河内の馬飼と雄略天皇／106　継体・欽明朝と河内の馬飼／107
五　河内の県主と国造……108
河内の県主／108　凡河内国造とその支配地域／109　国造軍と馬飼／109

第二節　中央集権体制への動き……110
一　推古朝の政治……110
隋帝国の形成と推古朝の成立／110　遣隋使と国内体制の整備／111
二　「大化の改新」と難波宮……111
東アジア情勢の緊迫と改新クーデター／111　大化改新の政治改革／112
百済救援と白村江の敗戦／113
三　壬申の乱と寝屋川地域……113
河内での戦闘／113　河内国司守来目臣塩籠の動向／115　塩籠の背後関係／115
四　律令国家の成立……117
天武天皇の即位／117　持統朝と藤原京／117
五　高宮廃寺跡と高宮遺跡……118
高宮廃寺跡／118　高宮遺跡／120
第二章　律令時代の北河内地域……124

第一節　律令体制の成立……124
一　大宝律令の完成……124
律令とは／124　行政組織と官吏・司法制度／124
二　国郡郷(里)制の成立……125
戸と里／125　郡と国／125　川内国から河内国へ／127
三　寝屋川市域の郡と郷……128
茨田郡の郷／128　讃良郡の郷／130　交野郡の郷／131
四　律令制下の民衆生活……132
戸籍・計帳による民衆支配／132　人頭税／132　その他の税／133
出挙と「河内国大税負死亡人帳」／134
五　条里制の実施……136
条里地割と条里地番法／136　市域の条里関係文献史料／137
市域の条里遺構とその復原／138　施行時期／139
第二節　律令体制の展開……140
一　律令政治の動向……140

平城遷都／140　藤原氏の進出と政界の動揺／141
二　行基と交通……142
行基の直道／142　茨田郡の行基関連施設／143
行基の事業に参加した人々／144　土塔の人名瓦／145
三　河内国歴名木簡にみえる北河内の氏族……146
歴名木簡と作成年代／146　木簡の作成目的／147　木簡にみえる氏族／149
第三節　奈良時代後半の北河内地域……150
一　政局の変化……150
孝謙天皇／150　紫微中台／150　淳仁天皇／151
称徳天皇／152　光仁天皇／153　桓武天皇／153
二　大仏造営と河内地域……154
河内の大仏／154　大仏造立と知識結／155　献銭と知識／156
平城と難波の市／157　河俣人麻呂と商業／158
三　茨田を名乗る人々……158
茨田連久治万呂／159　茨田王／161　茨田郡王／161　茨田連沙弥麿／162
茨田連稲床／162　茨田宿祢枚麻呂／162　茨田（萬多）親王／163

四　長岡京遷都……164
長岡の土地／164　茨田氏の乙訓郡移住／165　交野に天神を祭る／166
革命思想と桓武天皇／167　交野祭天の遺跡／167　交野行幸／168　兵士制から健児制へ／168
五　奈良時代後期～平安時代前期の洪水と治水……169
洪水と治水／169　食料と日当／169　築堤使の任命／171

第三章　平安時代の北河内地域……172

第一節　平安朝廷の成立……172
一　平安京遷都……172
長岡京洪水／172　平安京／172
二　『新撰姓氏録』に見える氏族……173
『新撰姓氏録』／173　交野郡の氏族／174　茨田郡の氏族／174　讃良郡の氏族／177
三　摂政・関白政治の展開……178
藤原冬嗣・良房流の躍進／178　良房と摂政／178　基経と関白／179

第二節　律令制の変質……180
一　讃良郡・交野郡の氷室……180
削り氷／180　氷室／181　氷の貢納／181　讃良郡の氷室／182　交野郡の氷室／183
二　茨田郡の江と江人……184
河内江（河内湖・河内潟）／184　供御江／184　江人・江長／185
大江御厨／186　河内国の贄と菓子／186
三　茨田郡の蒋・菅・菀……188
茨田郡の蒋（薦・菰）沼／188　茨田の葦原／189　蒋・菅・菀／189
四　延喜式内社の成立……190
神名帳と式内社／190　大社・小社／190　高宮神社／191
高宮大社祖神社／192　細屋神社／193
五　点野地区と鳥養牧……194
点野の意味／194　鳥養牧／194　茨田郡の牧／196
六　高柳遺跡と神田東後遺跡……197
高宮遺跡／197　神田東後遺跡／199
七　水上交通と陸上交通……200

淀川の交通／200　和田の泊の別れ／200　茨田真手宿所／201
茨田真手はどこか／201　陸上の交通・河内の古道／202
八　牧と馬飼……203
官有牧場／203　飼戸・馬部／204　星田荘／205
第三節　武士の成長……205
一　武士の登場……205
家の子・郎党・武士団／205　美努公忠ら同兼倫宅を襲撃／206　河内の豪族らの武装化／207
二　十～十一世紀茨田氏の興隆と没落……208
茨田助平／208　一〇二四年までの茨田氏・茨田重方／209
茨田弘近／211　一〇二五年以後の茨田氏／211
三　讃良郡の長者と粉河寺……212
粉河寺縁起／212　『粉河寺大卒塔婆建立縁起』／213　讃良郡の長者／214
四　交野郡小松寺の盛衰……215
小松寺／215　草創縁起／216　小松寺の史料／216

第四節　院政の時代……218
一　院政の様相……218
後三条天皇の即位／218　親政と院政／220　白河院政の確立／222　関白罷免事件／224
二　貴族政治と荘園制……227
延久の荘園整理令／227　荘園制の成立／229　摂関家領と王家領／230
星田荘をめぐる相論／235　河内の私牧／237
三　河内源氏の勃興……240
河内国と源頼信／240　前九年の役と頼義／243
後三年の役と義家／245　河内源氏の分裂／248

中世

第一章　中世の政治権力……254
第一節　源平争乱と河内源氏……254

源義朝と保元・平治の乱／254　石川源氏と源貞弘／258　源貞弘と金剛寺／260
石川源氏の復活／262　地頭石川義兼／264

第二節　承久の乱と藤原秀康……266
地頭停廃の背景／266　藤原秀康の登場／268　承久の乱／272　秀康一族の没落／275

第三節　南北朝内乱へ……277
関東御家人土屋氏／277　地頭土屋氏／279
足利尊氏と土屋氏／282　土屋宗直と南北朝内乱／285

第四節　両畠山氏の対立と応仁の乱……288
一　河内守護畠山氏……288
畠山氏の河内守護と管領／288　畠山持国と持永・持富兄弟／291
二　両畠山氏の対立……292
畠山氏の家督の行方／292　両畠山氏の対立／294　嶽山城と十七ヶ所の攻防／295
三　応仁の乱……297
応仁の乱前夜／297　応仁の乱と河内の合戦／300　応仁の乱の終息／303

第五節　明応の政変と細川政元・高国政権……304
一　明応の政変……304
十七ヶ所をめぐる義就と政長／304　明応の政変と基家・尚順の対立／306
二　畠山基家の自刃と細川氏の分裂……310
打ち続く戦乱と畠山基家の自刃／310　細川高国から三好長慶へ／312
第六節　三好長慶と松永久秀……315
一　三好氏の台頭……315
三好長慶の登場／315　長慶の連歌と領土／317
二　松永久秀と三好三人衆……319
三好長慶の死と松永久秀の台頭／319　三好三人衆と三好義継／320
第二章　中世荘園の展開……323
第一節　寝屋川の荘園……323

高柳荘／323　点野荘／324　池田荘／325　鞆呂岐荘／326
上仁和寺荘・下仁和寺荘／328　讃良荘／330　葛原荘／332

第二節　隣接地域の荘園……333

一　茨田郡の荘園……333
大和田荘／333　大庭荘／336　高瀬荘・小高瀬荘／337
波志波荘／339　島頭荘／340

二　讃良郡の荘園……341
岸和田荘／341　馬伏荘／342　讃良新荘／343　大炊寮領　御稲田讃良／343

三　交野郡の荘園……344
大交野荘／344　星田荘／345

第三節　河内十七ヶ所……346
十七ヶ所の地理的環境／346　幕府料所十七ヶ所／349　南御所料所十七ヶ所／353

第三章　陸上と水上の交通……358
第一節　東高野街道……358
古代の南海路／358　高野聖と東高野街道／361
第二節　淀川・大和川の水運……366
一　淀川諸関所……366
淀川の関所と関津料／366　寝屋川市域と淀川の関所／369
二　耶蘇会士と大和川の水運……370
三箇のキリシタンと深野池／370　アルメイダ大和川を行く／372
その後のキリシタン／375
第四章　中世の文化……377
第一節　信仰の世界……377

熊野詣でと鞆呂岐・秦郷／377　仁和寺庄と妙心寺／380　妙心寺の末寺　観音寺／383
北野社一切経書写と北河内／386　蓮如の河内在住と市域の真宗／391
第二節　文芸の世界……396
一　韻文……396
和歌と歌枕／396　北河内の歌枕一覧／399　連歌師仮託の地誌と千句連歌／401
二　散文……403
『太平記』と後期軍記／403　合戦を詠む狂歌『金言和歌集』／406
三　戯曲　狂言『禁野』……409
狂言『禁野』と北河内の文学／409
近世
第一章　近世を生きる……414
第一節　近世の幕開け……414

一　織豊政権……414
近世という時代／414　信長の戦争と畿内／415　検地と刀狩り／421
秀吉政権と畿内／424　大坂の陣と摂河泉の村々／426
二　徳川政権……430
泰平と安穏／430　大坂と周辺農村／432

第二節　近世の村……436
一　村の景観……436
一九四八年の寝屋川／436　草山の風景／438　水辺の風景／442　市域の村々／444
二　村に生きる……450
堤防に囲まれた村／450　村役人という仕事／454　村を維持する経費／458
村の住人／462　譜代の奉公人／471　五人組と牛の共同所持／474
三　村高とは……476
検地と村高／476　年貢の賦課／485　年貢の免除／490
四　経営者としての農民……491
土地の売買／491　どのような土地を所持していたのか／496
どのような作物が栽培されていたか／501

五　小農民の行方……505
二極化する百姓／505　財産の分割／508　浮沈を繰り返す小農民／512

第二章　広域支配と領主支配……516

第一節　軍事拠点大坂の誕生……516

一　大坂周辺の所領配置……516
徳川大坂城の築城／516　大坂の陣直後の所領配置／518　城持譜代大名の配置／519

二　河内国の位置……521
正保期の所領配置／521　山城国淀藩永井尚政領／524

第二節　幕府の広域支配……529

一　広域的な支配……529
大坂御用日／529　大坂町奉行とは／531　国役普請人足・銀の賦課／533

二　広域支配と百姓……535
文書のマニュアル／535　訴訟をすること／538　郷宿と用達／539

第三節　さまざまな領主……542
一　幕府領……542
摂河泉の幕府領／542　年貢／545　幕府蔵への納入／547　諸役／549　御用請負人／550
二　私領……552
陣屋による支配／552　旗本永井氏の蔵屋敷支配／553
小田原藩大久保氏の蔵屋敷支配／557　旗本永井氏の支配／559

第三章　水とくらし……562
第一節　河川を制す……562
淀川／562　河川の支配／565　土砂留／567　享和二年の洪水／569
第二節　堤防の風景……574
堤防／574　堤防を守る／577　堤防の利用／581　寝屋川堤防／583　中小河川の堤防／586

第三節　川をめぐる争い……589
瀬田川の川浚い／589　海口の新田開発／592　中州／594
第四節　水利の慣行……597
庄／597　友呂岐庄の水利／599　二十か用水／602　上庄の悪水／604　古川／605
第五節　川を行き交う……607
朝鮮・琉球使節の船／607　過書船と伏見船／610　屎船／612
第四章　幕末期の寝屋川……614
第一節　揺らぐ社会……614
一　変貌する村社会……614
大塩事件／614　富を求めて／617　村の工業者／620　村の商業者／622　米商人／625

二　苦悩する領主……627
御用銀の賦課と借銀／627　年貢の免除と御救い／629　倹約令／630　商業活動の取締り／632
三　秩序の動揺……633
身持ち不埒なる者／633　博奕／636　家出／638
四　政治をする百姓たち……639
村方騒動／639　小作騒動／642　さまざまな廻在者たち／645
第二節　幕末政治と市域の村々……648
一　幕末期の京坂……648
幕末政治の中心舞台／648　のしかかる助郷／650
慶応二年の打ちこわし／653　鳥羽・伏見の戦い／655
二　諸領主の動向……657
幕府領の動向／657　会津藩役知領／660　佐太陣屋／661
第五章　人々の暮らし……664

第一節　人別帳が語るもの……664
一　堀溝村の人別帳……664
二　近世堀溝村の概況……667
三　堀溝村の五年ごとの死亡者数と生存率……671
四　堀溝村の男女初婚年齢……673
五　堀溝村の通婚圏……675
六　堀溝村の出産人数……678
七　堀溝村の家相続人（名跡人）……679
八　堀溝村の史料が語ったもの……682
第二節　市域における「家」の成立と展開……684
家成立の定義／684　家相続と養子／686　女性相続人と家督／692
家名存続のための家政改革・相続講・合力／695　家に関する株／698
氏神造営奉加と村・家／700

近現代

第一章　行政……706

第一節　維新の変革と村の変動……706

戊辰戦争／706　府県制への移行／707　区制の施行／712　大小区制の施行／712
三新法と聯合町村／716　大阪府編入と毎町村戸長制／717
三郡町村聯合会／718　戸長管理区域の設定／719

第二節　町村制の村……722

町村制施行と町村合併／722　町村合併と戸長役場管区／724　名誉職自治／727
村会と府会／730　衆議院議員選挙／731　選挙と治水問題／733
選挙地盤の成立／735　北河内郡の成立／736

第三節　水利行政……737

明治初期の淀川修築工事／737　明治十八年の洪水／738　水防組合の結成／738

淀川改良工事／740　大正六年の洪水／740　淀川左岸水害予防組合の設立／741
淀川再改修／742　淀川左岸樋管統合／743　淀川左岸用水樋普通水利組合の成立／745
淀川低水工事／746　木屋揚水機場設置／747　淀川左岸土地改良区／749
東大阪農業水利改良事業／750　水道敷設事業／750

第四節　町制の施行と戦時体制……752
郡制廃止と町村合併／752　寝屋川町の成立／754　大政翼賛会／757
部落会と隣組／761　警防団と防空／763

第五節　融和政策の展開……766
一　融和政策の前夜……766
明治期の水本村と被差別部落／767　大正期の水本村と被差別部落／769
二　融和事業の始まり……770
部落改善運動と融和事業／770　村風呂の建設／772
自彊館の建設／774　台所改善組合の活動と成果／777
三　その後の水本村……779
水本村と戦争／779　戦後の解放運動へ／780

第六節　戦後改革と寝屋川市の誕生……781
戦後改革／781　自治体警察／783　消防団と消防組合／786
市制施行と財政問題／787　水本村の合併／792

第二章　経済……796

第一節　農業の発展と地主制……796
地租改正／796　地主制の展開／799　農業と諸営業の状況／802
同栄銀行の設立／804　勧農政策の展開／806　耕地整理／809

第二節　京阪電鉄の開通と地域社会の変貌……811
京阪電鉄の創立／811　京阪電鉄の線路建設／814　香里遊園地／817
香里住宅地の開発／820　通勤・通学の拡大／824　日露戦争後の農村／825
地主制の動揺／830

第三節　恐慌・戦争と寝屋川……835
昭和恐慌と農村／835　時局匡救事業／838　豊野村の経済更生計画／841
寝屋第一実行組合／843　寝屋川市域の工場／844
戦時下の宅地開発・軍需工場の設置／848　地主制の衰退／850
第四節　戦後の寝屋川経済……855
農地改革／855　地主制の解体／856　兼業農家の増加と農地の減少／857
市の工場誘致政策／859　新京阪国道と工場進出ラッシュ／862　都市化の進展／864
第三章　社会……867
第一節　農村社会の変容……867
維新動乱の波紋／867　田園地帯の文明開化／868　淀川の大洪水／870
徴兵制と国民皆兵／872　日露戦争と郷土の英雄／873　地方改良運動／876

第二節　民衆の時代の寝屋川……877
京阪電鉄と文化生活／877　農家副業と賃労働／880　農民組合と自転車／881
地主小作関係の変化／883　香里園住宅のモダニズム／884
大恐慌と農村経済更生運動／887　室戸台風の被害／888
第三節　戦時下の寝屋川……890
強まる戦時色／890　工業化の進展／890　宅地化と人口増／894
新体制と部落会・隣組／896　銃後の市民生活／897　戦争の爪あと／899
第四節　戦後の混乱と復興……901
敗戦直後の世相／901　復興の糸口／904
火薬工場と原子炉をめぐって／905　変貌する寝屋川／908
第五節　住まいと居住地の形成……910
一　明治初期前後から残る「民家」の特性……910
民家調査の意義／910　典型間取りと改造事例／912

二　大正デモクラシー期と近代「文化住宅」の登場と特性……915
香里住宅地と近代住宅／916　近代文化住宅の分布／918
典型住宅における間取り／921　近代文化住宅の果たした役割／923
三　高度成長期の木賃「文化住宅」の特性……924
木賃型「文化住宅」の意義／926　木賃型「文化住宅」の間取りと居住者層／927
四　民家継承に対する居住者の意識……929

第四章　教育・宗教……932

第一節　学制と神仏分離……932
学制の公布／932　寝屋川市域の小学校／933　明治初年の学校設備／934
明治中期の小学校／935　行政村と小学校／936　青年と夜学／936
明治初年の宗教政策／937　信仰と修験道／938　民衆世界に対して／939
宗教政策の是正／940　小楠公五百五十年祭／941

第二節　中等教育の充実と神社合祀……943
教育制度の拡充／943　初等教育の充実／944　河北高等女学校の成立と展開／945
高等女学校の雰囲気／946　都市郊外として／947　地方改良運動／948
神社合祀政策の展開／949　市域の神社合祀／950　寝屋神社の合祀／950
再度の合祀交渉／951　地域秩序の変化／952

第三節　戦時下の教育……953
戦時教育の概略／953　戦時下の初等教育／954　戦争の影響／957
第二山水中学校の設置／958　学童疎開と市域／961　校舎の転用／962
敗戦と市域の学校／964

第四節　戦後改革期の教育・文化……965
敗戦と教育改革／965　小学校の戦後／967　新設中学校の設立／969　新制高等学校／972
社会教育の展開／972　宗教団体と戦後改革／974

年表
参考文献一覧
写真・図・表一覧
資料提供者・協力者
編纂関係者
編纂委員会委員